随想

第181回

敬老について想う

—活力ある長寿社会のために—

土岐市長　塚本保夫

わが国では、史上初の本格的な人口減少社会がやってまいりました。

少子・高齢化は、急速に進みつつあり、このままでは社会の活力が心配される状況であります。

人口問題研究所などで発表されます人口統計では、過去数十年間変わることなく、0歳〜14歳を「年少人口」、15歳〜64歳を「生産年齢人口」、65歳以上を「老年人口」に区分しております。

そして、生産年齢人口は、全体の7割弱で、年少人口と老年人口を加えた「扶養人口」が3割強であるという状況が続いておりますが、問題は、扶養人口の中味であります。

かつては、年少人口が大半で老年人口は、ごくごくわずかでありました。

しかし、少子・高齢化の影響で、子どもが減り、高齢者が急速に増加するのに従い、最近では、扶養人口の半分以上が老年人口となって逆転し、年金・医療など社会保障費の国民負担が増加し続けております。

そこで考えますのは、従来の人口区分を社会の実態に合わせて見直したらどうかということです。

つまり、高学歴社会を踏まえて19歳までを年少人口とし、20歳から74歳までを生産年齢人口、75歳以上を老年人口とすれば、恐らく、生産年齢人口と扶養人口との割合は、今後とも7対3に近い割合が維持され、扶養人口の内訳もバランスの取れたものになります。

74歳までを生産年齢人口にするのは、酷だとの批判もあろうかと存じますが、冷静に考えれば、50年前の64歳と現在の74歳を比較すれば、現在の74歳の方が若々しく元気ではないかと存じます。

高齢者が元気で頼りにされるのも、敬老の一つの姿ではないのかなと思うからであります。

高齢者が生き甲斐を持って無理をせずに、長年の経験を活かして畑仕事を含む生産活動の一翼を担っていただければ、社会の活力を維持する大きな力となります。

経済社会は、機械化やIT化が進み、過酷な肉体労働ではない分野で豊富な知識と経験を活かしていただけたら幸いであります。

ところで、「健康は無くして気付く宝物」という教訓的キャッチフレーズがありますが、健康な時にこそ充分な体力づくりが必要であり、健康こそが幸せな人生にとって何より大切なものであります。

そこで、お知らせでありますが、この4月末に、曽木温泉の湯を利用した「バーデン・パークSOGI」を開設しオープンいたしましたが、利用者の方々に好評で、大繁盛であります。

予定入場者数の数倍のご来場もあり、混雑のため、一部ご迷惑をおかけしていることもありまして、申し訳なく思うこともあります。

オープン当初は、露天風呂を楽しまれる方が大半でありましたが、施設の本来の目的は、温泉利用型健康増進施設ということでありまして、水着を着て各種の装置のあるプールの中を歩き、丈夫な身体をつくっていただくのが願いであります。幸い最近では、3割くらいの方々が楽しく利用して健康づくりに励んでいただけるようになり、さらに多くの方々にご利用いただければと願っております。

そこで、国民健康保険の保健事業の一環として、希望者を募り健康づくり講習会を企画しております。

ところで、東海環状自動車道の開通で、本市は大きく注目を集めておりますので、その有利さを活かして、現在、本格的な企業誘致に取り組んでおり、有力企業の進出の期待が高まってきております。

将来に向けて、産業構造の高度複合化を進め、若者に希望の持てる職場を拡大確保し、地元の若者の定着と、市外からの若者の導入を積極的に推進し、元気な高齢者のシルバーパワーとのバランスの取れた地域社会を構築して、少子・高齢化社会で自立できる街づくりを推進することが肝要であります。

活力ある長寿社会のために!!